

中部地方の古代銅像

はじめに

近年中部地方には、七世紀から九世紀頃までの古代銅仏像が、かなりの数残っていることが知られるようになった。多くは一度以上火災にあり、そのあと永く土中にうもれていたものが、いつの時代にか発掘され、あるいは神社の御神体となつてこつそり伝わったものや、洞窟内にまつられ、附近の民衆の信仰の対象となつていたもの、あるいは、崖くずれ等の際にたまたま村人の眼にふれ附近の小寺に寄進された仏像などで、そのためあまり人眼にふれることなく、近年までその存在さえ知られずに残つたものであらう。

いまこれら中部地方の古代銅像の分布をみると、それらは、日本海沿岸にかたよつており、太平洋側にはほとんど残っていないことに気がつく。具体的にいえば、中部地方の古代銅像は、新潟・富山・石川・福井・長野の諸県に分布し、太平洋側の静岡・愛知・岐阜の諸県には、後世中央から移安されたと推定されている像が二軀ほどあるが、その土地と結びついた遺品ではないようである。また日本海側の諸県に遺る像も、

久野健

大別して、三種に分類できるのではないかと思われる。すなわち、一つは古い時代に朝鮮半島から渡来したのではないかと考えられる像、二は中央において制作され、後にこの地方に伝わってきたもの、三はこの地方で制作され、この地方に伝わったと考えられる銅像である。しかし、この三種は、区別出来そうでなかなかわざかしい問題を含んでいる。これは、ことに七世紀前半にまで遡る遺品については、その制作者が、大部分朝鮮半島からの渡来の工人であつたため、彼の地で制作したものがわが国に渡つてきたものか、大陸系の工人が渡来後、あまり時間をへていない間にわが国で制作したものかの区別は、現在のところ断定はむずかしい。それ故、本稿ではこうした点については断定をさけ、ここでは問題を提起するにとどめたい。

一

中部地方の日本海沿岸が、朝鮮半島と関係が深かつたことは、その地理的關係からみて容易に想像されるが、特に、六、七世紀において朝鮮の使者が、越の国にしばしば漂着していることが知られている。すなわ

ち、欽明天皇三十一年紀には、越の国に高麗の使者が漂着したことを奏す¹とあり、また敏達二年紀には高麗使人、越の海岸に漂着、これを放還す²とあり、さらに天智七年紀には、高麗の使人が越路より使を遣して調を進むとある。これらの使者が越の国のどの辺の日本海岸に着いたものかは分らないが、しばしばこの地に漂着しているという事実は、恐らく潮流との関係で、北鮮からの船が、同地方に着いたことを物語っている。また前記の記事は、正史に残ったわずかの事例であるが、さらに古い時代から、より多くの人々が越の国に漂着し、中には、同地方に住みついた者も多かったであろうことが想像される。こうした人々が朝鮮の文化を同地方に伝え、またそうした知識から朝鮮との交易等が一部に始められても不思議ではあるまい。日本海沿岸地方は、恐らく従来考えられていたよりも、早くに仏教が根付き、それにともなう文化も開けたのではないかと考えられる。

しかし、中部地方の古代銅像は、日本海を遠くはなれた山深い長野県にもかなりの数残っている。これは何故だろうか。これもまた朝鮮との関係が考えられる。例えば、長野県下でも最も興味ある半跏菩薩像を伝える観松院は、北安曇郡にあるが、この安曇郡^{註1}というのは、古くより安曇氏が、居住していたためにこの名があるという。安曇氏は、日本の黎明期に北九州の玄海灘に本拠をもち、多くの海人（船を支配する人）を率いて活躍したグループといわれる。安曇氏について原田伴彦氏は、

彼らは各地に発展し、その足跡は南は淡路から、東は北信州の安曇郡一帯にまで及ぶが、その一隊は、敦賀・小浜をへて湖南（琵琶湖の南）の地にまで進出した

と述べている。七世紀頃には、この氏族からは、対朝鮮関係の仕事をする者が多くあらわれ、阿曇比羅夫などもその一人である。かれは、百済の武王の死に際し、弔使として百済におもむき、また斉明天皇七年には高麗の来攻に際して百済救援に派遣されている。このようにこの氏族が朝鮮との関係の深いことは、この地が渡来系の氏族により開拓されたことを物語るものであろう。

また信州の地が、朝鮮と関係深いことは、古墳の形式からも推定されている。この点については、早くに斎藤忠氏により指摘され、^{註2}また近年では「信濃・長原古墳群」^{註3}や「長野県大宮古墳群」^{註4}においても詳細に論じられている。

斎藤氏は、長野県埴科郡豊栄村所在の空塚や同県下高井郡日野村大字新野の金鎧山古墳の他、県下に二例ほどみられる古墳の石室の天井が、両側壁からそれぞれ磐石を斜めに立て、頂上部で合掌せしめ、あたかも切妻形を思わせる構造に注目し、この特殊な石室の天井は、朝鮮三国時代の百済石室の天井と共通するものであることを指摘している。すなわち忠清南道公州邑錦町に存する百済時代の古墳の石室の天井の他、公州においても同様な構造の天井が二例報告されており、この他にも信州には、大陸の色彩の濃厚な積石塚の古墳の多いことに注目した。

これに対し、大場磐雄氏等は、この地の開拓に力をつくしたのは、高句麗系帰化人ではないかという説をとなえられ、^{註5}また近年における同地方の古墳の発掘調査の結果は、益々この地と渡来人との密接な関係を明らかにしつつある。

長野県は、日本海を遠くはなれているが、こうした渡来系の人々によ

り早くに仏教文化を受け入れる素地ができていたのではないかと考えられる。こうした土地であればこそ、七世紀にすでに善光寺のような寺が創建されたのであろう。扶桑略記及び覺禪抄によれば、善光寺は、推古天皇十年に百済伝来の阿弥陀如来像を本尊とする寺として建立されたと伝えている。もっとも近年の山内から出土する瓦や縁起、本尊の様式等からの研究では、同寺の創建は七世紀中期頃といわれているが、^{註6}それにしても飛鳥時代の末期にあたっている。この地方に中部地方でも最も古い部類に属する銅像が伝わっていてもそう不思議ではないのである。

二

中部地方の銅仏中でも最も古様を持つ像の一つは、長野県と新潟県の県境に近い関市の関山神社に残っている。同社の御神像として伝わった銅造菩薩像がそれである。本像については、すでにいくつか論文を書いているので、^{註7}ここでは簡単にふれることにする。この菩薩立像の伝来については、あまり明瞭ではないが、この像が収めてあった箱の蓋に次のような墨書がある。

旧来祠中封於聖觀自在

之一臂以為地主神体思

近古焼亡適得之灰中以

納之耳

元禄己卯冬 沙門子義記

とある。元禄己卯は元禄十二年にあたっている。これによると、本像は古くより関山神社の地主神像として祠中に安置されていたものである

が、近古火災にあい焼亡したので、灰中よりとり出し、この箱に収めたということが知られる。また内箱には、明治四十四年の年記と新羅大明神と墨書されている。

この菩薩立像(挿図1)は、この箱書に記されているように明らかに火中しておりいたみは多いが、その様式はきわめて古様で、種々の問題を含んでいる。本像は、宝冠の上部を失い両手も前膊中央より欠失し、両足先、両腕からたれる天衣もなくなっている。頭部がやや一方にかたむいているのも、火災の際にこうなったものであろう。頭上には髻がなく、両耳の後方から垂れる垂髪は、両肩にかかり、蕨手形の曲線をえがいている。胸には胸飾をつけ、服制も、普通の菩薩像のように上半身が裸ではなく、天衣が両肩をおおい、胸の部分には下着の端が胸をよぎり、その縁には、半パルメットの文様が線彫になっている。腰には長い裳をつけ、両肩から垂れる天衣が膝上で交叉し、さらにその上に両肩から続く珠つなぎの瓔珞があらわされている。両腕から体の左右にたれる天衣は、一部は失われているが、鰭状をなして左右にひろがっている。現在失われている両手は残った前膊の部分から考えて、恐らく法隆寺夢殿観音像や四十八体仏中の辛亥年銘観音立像と同じように胸前で、上下に合せ宝珠をとっていたものではないかと推定される。

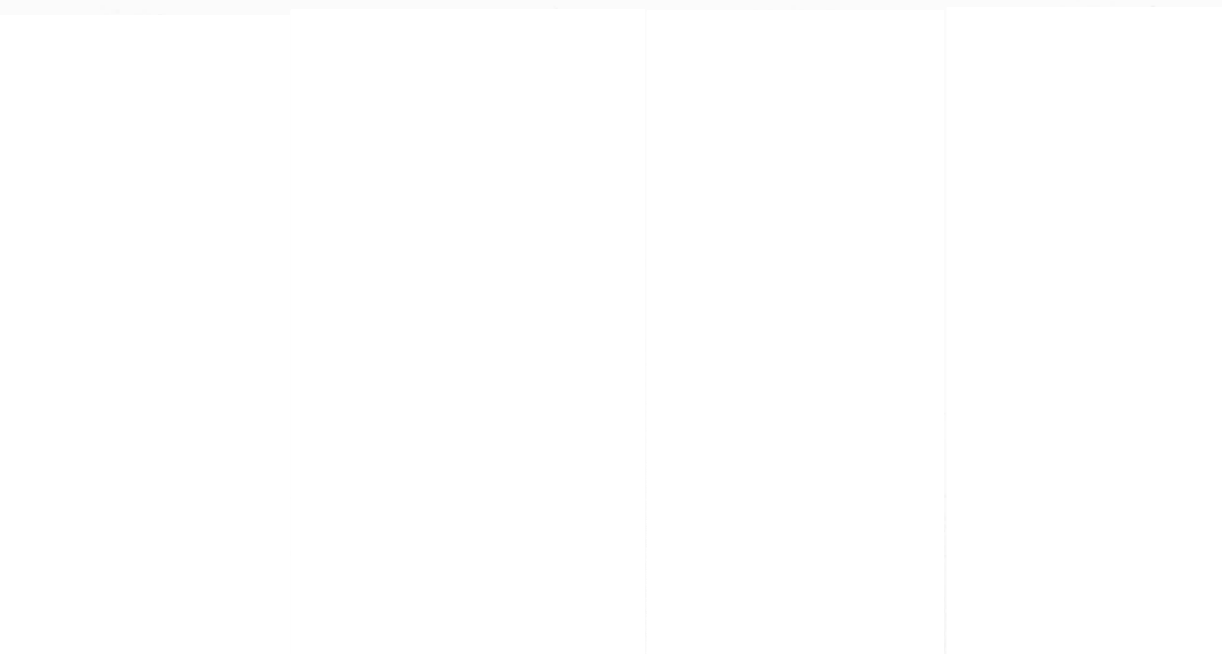
この菩薩立像の側面観は、全体に扁平で、やや頭部を前方につき出し、胸をひき、下腹を出した姿をしている。これも夢殿観音像や六朝時代の明器泥像の姿等にきわめて近く古様である。また背面は、裳の衣文を垂直に刻み、その裾の部分の衣文線は左右相称的にあらわしている。背中の部分には、下着の端がななめによぎり、そこに半パルメットの文

a 正面 b 斜右側面 c 左側面 d 右側面
挿図1 a~e 菩薩立像 新潟 関山神社蔵

様を線彫にしている。両肩からたれる天衣は裳の上で二重のU字形の曲線をえがき、これも夢殿観音像と共通している。像高はわずかに二〇糎ほどの小像であるが、これほど夢殿観音像に近い形式をもつ像は恐らく他にあるまい。しかし、本像の両肩に強く弧線状に鑿をいれ、眉を表現しているところや、眼や口の造りは、やや日本の七世紀前半の金銅仏とは違っており、あるいは、これは朝鮮からの渡来像ではないかと考えられる。しかし今日の朝鮮には、このように夢殿観音像に近い像はなく、その点でもきわめて貴重な遺品といわねばならない。

長野県北安曇郡松川村町屋の観松院に伝わる菩薩半跏像（図版四・挿図2）も、また先にふれたように、朝鮮との関係を考えさせる遺像である。この像は、寺伝に観世音菩薩と呼ばれている銅像で、宝髪を双髻に結び頭上に見事な山形宝冠を頂き、円形の榻座にかける。左脚は垂下し、右足を左膝の上におき、左手を垂れて右足首の上におき、右肘を右膝上について屈臂し、右手の掌を正面にむけた姿で、いわゆる半跏の形

e 背面



a 正面
b 左側面
c 右側面
d 背面
挿図 2 a~f 菩薩半跏像
長野 観松院蔵

をとつてい
る。総高三
〇糎であ
る。本像は
少くとも一
度は火中し
ており、そ
の際失われ
たものか、
右手の前膊
の中央より
手先までは
木製で後補
のものにな
っている。

e 頭部

右手は本来いまのような印相であつたか、又は右手で頰杖をつく思惟の
姿であつたかは不明である。また台座も、現在の榻座の下にもう一段反
花があつたものと推定されるが、それも失われている。

この菩薩半跏像も、宝冠から台座まで蠟型鑄物による共吹の像で、台
座の内部は空洞である。この空洞部は、腰下の部分までつづき、中央に
は鉄心らしいものがみえる。本像ももとは鍍金してあつたものと思われ
るが、現在は全くおち、銅錆におおわれている。表面の肌も火中してい
るため荒れているが、その作ゆきはきわめてすぐれており、宝冠には、
夢殿観音像等に見られるのと同様な三日月に太陽を組み合せた文様をあ
らわし、胸飾や裳の縁にきざまれた唐草の文様などもないへんすぐれて
いる。

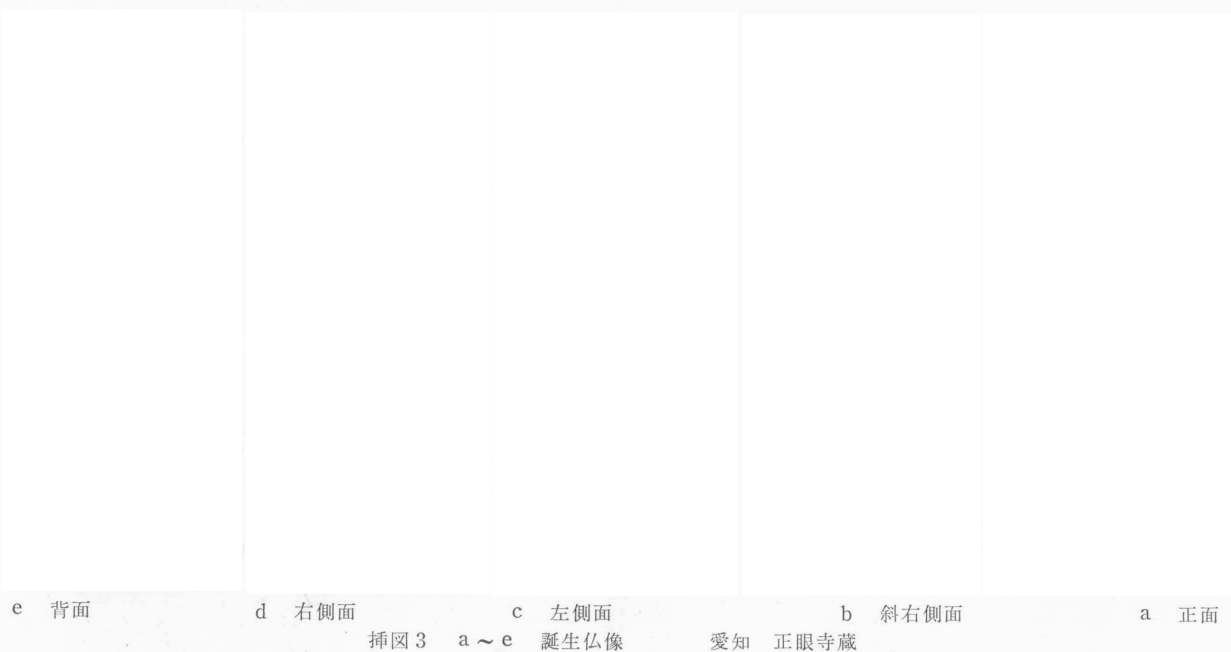
この像は、一見して奈良・神野寺の半跏思惟像とすこぶる類似してい
るのに気がつくであろう。山形の宝冠及びその左右から垂下した飾紐、
耳の後から髪毛が両肩に垂れた形式、面長な顔付や強く胴のくびれた細
身の体軀、胸飾の形式、また右脚をおおいカーブをえがいてたれる裳の

f 下半身

先端の形式、左脚にかかる衣文線等、すこぶる共通している。しかし、前方に曲線をえがいてせり出した宝冠の形式や、右脚にかかる裳のカーブ等を比較すると、観松院像の方が一段と勢があり、神野寺像よりも先行する様式をもっているのではないかと考えられる。くつきりと二本の弧線をえがいて、刻み込まれた眉、顔に比して大きい切長の眼、強い曲線をもった唇の様式も、神野寺像よりも古様である。また右足の裏に深くきざみ込まれた刻線も生きており、こうした種々の特徴は、本像の制作年代が七世紀中葉を下るものではないことを物語っている。

観松院の菩薩半跏像もかなり古くからこの地に伝わったものであることは、本像を安置する堂内に「観世音御本堂再建寄附人名」と記された木札があり、それに明治十二年八月二十八日の日付が入っているところから考え、明治十二年には本像を安置していた堂が、老朽化してしまっていたことを伝えているよう。

さて、この像も古いだけに朝鮮からの渡来像か、わが国での制作かは難しい問題である。前記したように本像の伝わった北安曇郡のアズミという地名が、渡来人と関係深い点を考えると、いっそう渡来仏の可能性が強いが、一方今日朝鮮に遺る多数の半跏菩薩像と比較すると、その姿や面相に朝鮮三国仏には見られない細かな整いを見せており、こうした点を考えるといちがいに渡来仏と定めるわけにはゆかない。まして、朝鮮には、これに近い様式の像を見出すことが出来ないのに対し、わが国の遺品には、神野寺像のようにきわめて近い像があるということは、本像もまたわが国での制作ではないかということを考えさせる。七世紀前半の銅像は、大部分が、朝鮮からの渡来の工人の手になるもので、その



挿図3 a～e 誕生仏像 愛知 正眼寺蔵

ため、古いほどその制作地を決めるのが、むずかしいわけであるが、朝鮮から渡来してその時間のたっていない工人が制作にあたった場合にはわが国で制作しても、このような銅像が出来るのではないかということも考えられよう。

中部地方には、もう一体、七世紀前半にまで遡り得るのではないかと考えられる金銅像がある。愛知県小牧市三つ淵の正眼寺に伝わる誕生仏(図版五、挿図3)

がそれである。正眼寺は、古く中島郡下津の東にあった廃寺伝法寺を応永元年に下津の領主青生直正が再興し、天鷹を開山として曹洞宗に属さしめ、以後青生山正眼寺と名づけ、尾張における曹洞宗第一の巨刹として、威勢を誇ったが、後水害の難をうけ元禄二年今の地に移されたものという。^{註8}この誕生仏がいつから同寺に伝わったかは不明であるが、小像ではあるし、また前記した本寺の創建からして、本来この寺の安置仏として制作されたものではなく、いつの時代かに本像が同寺に寄進されたものであろう。

この像は、像高八・三糎、足より頭上にあげた右手の指先までが八・七糎の小像であるが、今日も鍍金がよく残っており、また中部地方では、最も古い様式を伝える像として貴重である。

右手をあげ天を指し、左手を垂下して地を指し、天上下唯我独尊と獅子吼したという釈尊の誕生時の様を現わした誕生仏共通の姿である。

本像は、頭部体軀から両手、両足、さらに蓮肉から恐らく蓮莖部をも含めて、一鑄により制作された蠟型鑄物による銅像であったと考えられるが、両足下に蓮肉の一部を残すだけで現在の台座は後補のもの、この後補の台座に残った蓮肉部がはめ込まれている。

さて、本像の体軀に比して頭部及び両手が著しく大きいのは、幼児のプロポーションを造形に移したものとして当然であるが、その他にも各所に古い様式を示している。頭部は面長で、両頬の肉付がよく、頭頂の螺旋髪は、格子型に刻線をいれて表現されている。この面長な面相や眉を強く表わさない点や笑みを浮べた唇、長い両耳の表現等は、四十八体仏中、止利派に属する如来立像に^{註9}近く、たいへん古様である。体軀はほと

んど抑揚なく、腰には短い裳をつけているが、この裳に刻まれた左右相称的な衣文や腰紐の結び目にも本像の古さを伝えている。さらにふとぶとした両手両足の表現も古拙味があり、恐らくこの誕生仏は、七世紀前半にまで遡り得るのではないかと私は考えている。

またこの鍍金の発色や一見稚拙の如くに見えてなかなかたくみな肉身部の表現やおさな表情を無理なくあらわした面相等は、本像が恐らく当時の文化の中心であった大和ないし、その近くで制作されたものらしいことを物語っている。なお、この像では可愛い両乳まで表現されているのは誕生仏中でもめずらしいだけではなく、今日残る誕生仏中에서도最も古い遺品の一つであろうと推定される。

三

中部地方には、七世紀後半から八世紀初期すなわち白鳳時代の銅仏も数体伝わっている。その中でも、比較的古様をとどめているのが石川県珠洲郡内浦町松波の薬師寺の本尊伝薬師三尊像(図版六、挿図4)である。薬師寺は能登半島の先端にあり、岩の多い浜に近い寺で、本堂に立つと、眼前に日本海が一望できる景勝の地に建っている。

この薬師三尊像については、延文三年の年記をもつ「苦能離薬師縁起」と呼ばれる同寺の縁起に、本像が海底より浜に打ちあげられた尊像であると伝えている。すなわち、ある夜村人が此の浦の海中一面に金色に光るものをみつけ、船を出し、海底をさがしたが、その光る物は海底数百丈の底にあり、何物か知ることができなかった。ところが、それより八日目の朝、浜の岩上に光る物があり、よく見ると閻浮檀金の薬師如

c 同 右側面

来・日光・月光の
三尊像であった。
このことをききつ
けた人々は、近郷
は勿論遠方の村々

からも参詣に来、日ましにその数をましていった。そこで志のある人々が力を合せ一つの堂を建立し、また堂守の僧が住居するようになり、日夜香花供養したところ、この本尊の靈驗あらたかなることは、眼病の人がこの尊に祈誓すれば忽に眼明かになり、種々の病の人何病にても供養祈誓すれば、たちどころに全快し、また世間の苦を離れんと願えば、

b 薬師如来 斜左側面

a 斜右側面

e 底面

d 薬師如来 背面

j 同 背面

i 同 右側面
挿図 4 a~j

h 右脇侍 正面
薬師三尊像

g 同 左側面
石川 薬師寺藏

f 左脇侍 正面

自然とその苦を離れるが故に苦能離といわれるようになったという。しかし、中古甚だ衰微し、堂も破壊してしまった。その節、盗人が此尊像が黄金であることを知り盗んで越後の国に運び、鍛冶屋で仏鉢を焼潰さんとしたところ、その火が飛んで人々が多く死亡し、近在の家が焼けたのでおそれをなし、懺悔して、再び此の地に返したといわれ、その時の鎚疵が今に残っている。また、この像は信濃国の善光寺の如来と同伴とも相伝えていると結んでいる。

この「苦能離薬師縁起」はいうまでもなく、同寺の薬師三尊の靈驗を伝える縁起共通の修飾の多いもので、もとよりどれだけ真実を伝えているかは疑問であるが、この三尊が、少くとも中古以前から同地に伝わった古像であることは認めてもよいであろう。

次にこの三尊像（挿図4）の技法及び様式をみよう。まず中尊の薬師如来と伝称されている像は、いわゆる宣字形台座に結跏趺坐している。身には厚手の衣を通肩にまとい、その裳が長く台座から垂れているのは、たいへん古様である。右手は右膝の上に伏せ、左手は左膝の上に掌を上にしておき、第一指にて掌上の小さな玉をおさえている姿である。像高は一九糎。台座は典型的な宣字座で、上框を三重に造り、その下に背の底に須弥座をおき、下框も三重となっている。さらにその下に四辺に香狭間をもつ台座を造りだしている。台座の高さは十二糎である。

本像は、頭部から裳懸宣字座にいたるまで一鑄の造りで、台座の内部は空洞、像も胴身部は中空の像と考えられるが、胴身部の中央より上は、中型の土が残っているので明確には分らない。この像も蠟型鑄物による鑄造で、表面にはかなりよく鍍金が残っているが、大部分蒼古とし

た錆及び煤でおおわれ一部に鍍金がのぞいているにすぎない。鍍金は黄色味をおびた黄金色である。また本像は、台座の一部と胴身部に鑄掛たあとがあり、胎内には、方形の型持がみられる。破損はきわめて少く、台座の正面の香狭間の中央部が失われているのが眼につく位である。この部分は、本来鑄そこない別鑄にして釘どめにしたらしく、現在も釘穴が残っている。この他左右及び背面の香狭間の下辺部ももとから下がぬけていたものか、後世切断されたものかは分らないが、恐らく、後世何等かの理由で、切ったものではないかと考えられる。

次に両脇の像をみよう。本尊の左脇侍、寺伝に日光菩薩と呼ばれている像は、本尊の台座の下框からS字形をなしてのびる蓮茎の上に直立の姿で立っている。頭には髻を結び、三面宝冠を頂き、胸に飾りをつけ、裳をつけ、左手は掌を上にし、右手は何物かを持っていたような手つきである。現在もその持物の上部が手中に残っており、その形と右脇侍の右手の持物とから考えると、同像も可愛らしい水瓶をもっていたのではないかと推定される。三面宝冠の正面には、はっきりと阿弥陀の坐像が表わされている。この標識からすると本像は観音菩薩ということになり、従って中尊は、阿弥陀如来として制作された可能性が強いが、中尊を阿弥陀如来とすると、左手に宝珠をもつ阿弥陀の例は古代の遺品中に見られず、そう決めるわけにもゆかない。この三尊像が現在の地で制作されたものではないとしても、中央の正系の工房の作とは考えられず、また未だ儀軌の確定していない頃の制作なので、かかる姿の像が生れたのではないかと考えることもできよう。

さて、この左脇侍像は像高が一六・六糎、蓮肉を加えた総高が一八・

六糧である。頭部体軀から蓮肉まで一鑄の作で、ムクの像と考えられる。本像も鍍金がよく残っているが、大部分は錆と煤でおおわれている。本体をささえるS字型の蓮莖部は鉄製で後補のもの、その他本像は、右手の持物の一部と両手よりたれる天衣の先を失っている。

右脇侍像も同様本尊の台座下框から出たS字型にカーブした蓮莖の上に立っている。三面宝冠を頂き、両肩より長く垂髪をたれ、胸に瓔珞をつけ腰に裳をつけた姿で、左手を伏せ右手に水瓶をもっている。天衣には、こまかな刻線をいれている。この像は、頭部から体軀蓮肉及びS字形の蓮莖まで一鑄の像であるが、蓮莖の本尊台座と接する部分は、別鑄で後補である。鍍金も他の二像と同様よく残り、その金色や錆の状態からしても、この三尊が、同時の鑄造であることはまず間違いない。像高は十六・八糧、蓮肉を加えた総高は一八・二糧である。なお、台座の下框の背部には四つの小穴が残っており、あるいはこの三尊をおおう光背のあとかとも考えられる。

さて、この中尊像の著しく面長な面相や耳朶の長い耳、顔の割に著しく小さな唇、やせ形の体軀をおおう厚手の衣、また左右相称的に刻まれた裳懸の形式、さらには宣字形の台座にいたるまで、きわめて古様で、本像が七世紀前半の形式を踏襲するものであることは、一見して想像がつく。しかし、この中尊像に比べ両脇侍像は、頭上に髻があらわれ、三面宝冠を頂き、身には瓔珞をにぎやかにつけている形式やその面相が童顔であるところは、明かに七世紀後半に流行した仏像様式の影響をうけている。つまりこの三尊像は、古い要素と新しい要素がいりまじっていることが分る。このように様式的に不統一であるということは、本

像が中央の正系の仏工の手になったものではなく、新旧の仏像を手本にし、やや中央からはなれた地で、傍系の仏師により制作されたためではないかということを考えさせる。従ってその制作年代は、七世紀後半と見てよいものではないかと推定される。あるいは、この像が、日本海に面した能登半島の先端にあり、縁起にも海から現われたと伝えるところから、あるいは朝鮮からの渡来像ではないかとも考えられるが、私は現在のところ、渡来仏とは考えていない。無論、制作者は、朝鮮からの渡来人の系統であろうが、この三尊像の両脇侍像の面相は、明かに日本のもので、朝鮮の三国仏ないし、新羅仏からは遠いと考えるからである。

七世紀後半には、畿内を遠くはなれた地方にでも、かなり優れた銅像が制作されていたことは、島根・鰐淵寺の銅造観音像等からも推定出来る。この観音像は、その台座銘から持統六年（六九二）に出雲の地において制作されたことが明記されている。朝鮮との交通の便のあった日本海沿岸地方では、鑄造技術も早くに伝えられ、七世紀後半には、かなり優れた銅像が制作されていたことを鰐淵寺像は暗示している。同じような地理的条件にある中部地方の日本海沿岸もまた同様だったのではないであろうか。しかし、この本尊像の面相や服制からすると、これを制作した工人は、前記した観松院の半跏菩薩像と同様、渡来後それほど年代をへていない大陸系の工人ではなかったかと推定される。また両脇侍の面相からみると、この三尊像の手本となった像は新旧の様式をもつ日本及び朝鮮の像を組み合わせて造頭したものではないかと考えられる。

この薬師寺薬師三尊像に近い頃の制作ではないかと推定される像の一つは、新潟県高田市大字大貫にある医王寺に伝わった伝薬師如来坐像（挿図5）である。この像は頭部をやや右に傾け、右手の五指を開いて掌を正面にむけ、左手は左膝の上において掌を上にし、第二指から五指ま

や衣の縁に珠つなぎの刻文がみられる。この珠つなぎの刻文は単に丸文をこまかく打込んだものではなく、衣文の稜の左右に左右相称的に丸文を打ち込んだもので、この技法も四十八体仏中の同種の文様と共通している。

a 正面 b 斜左側面 c 斜右側面

d 左側面 e 右側面 f 背面

挿図5 a～f 伝薬師如来坐像 新潟 医王寺蔵

でをまげて何物かを持つような手つきにつくられている。身には衣を通肩にまとい、胸には下着の一部がななめによぎり、腹前には、腰紐の一部がのぞいている。膝下には長く裳をたらしている。

本像も火中しており、鍍金はおち、全身赤っぽい焼肌になっている。頭部がやや右に傾いているのもこの火災の際にまがったものである。頸には亀裂がはいり、左手の第三指もかけ、光背も柄穴を残すのみとなっている。この像は頭部から裳懸まで一鑄の像で、頸の下まで空洞となっている。像高は一七・六糎、頭部から裳懸の先端までの総高が二四糎である。

丸顔で、典型的な童顔をした像、眉はくつきりと弧線状にほられ、眼は二重瞼に造られている。体軀はかなり肉づきよく、それをおおう衣は厚手に造られ、衣のふちには、四十八体仏中にいくつか例のある衣文



a 斜左側面
b 背面
挿図 6 a, b 観音菩薩立像
長野 丸山茂氏他四氏共有

本像は火中しているために、現在は四十八体仏等と比べると、ややみ
おとりするが、面相の表現や服制及び文様にいたるまで、中央で制作さ
れた七世紀後半の像と共通しており、恐らくこの地方の制作ではなく、
大和を中心とする地方で造顕され、いつの時代かにこの地に移安された
ものではないかと考えられる。

医王寺の伝薬師如来像に近い頃の制作ではないかと推定されるのが、
長野県丸山茂氏他四氏共有の銅造観音菩薩立像（図版7、挿図6）であ
る。この像は長野市の中心部からさほどはなれていない丘陵の中腹に建

っていた山千寺という寺の本尊といわれ、同寺は明治維新の際に廃滅
し、その本尊が丸山茂氏等の共有として今日まで伝えられた。この観音
像は像高二九・七糎、台座の高さは八糎、頭上に見事な髻を結び、三面
宝冠を頂いた像で、宝冠の正面には化仏を造り出し、観音菩薩像である
ことが分る。体軀に比して頭部が著しく大きく、眉、眼、耳、口等もく
っきりとほり出されている。体軀は胴がくびれ、腰がふとく、かなり抑
揚がある。胸には華麗な胸飾りをつけ、その飾りは長く垂れて両膝上に
まで及んでいる。左手は四指をまげて掌を正面にむけ、右手はまげて持
物をもっていたもののようである。恐らく水瓶を持っていたものではな
いかと推定される。ただこの指先でも分るように本像は、少くとも一度
以上火災にあい、右手の指先や両腕より垂下する天衣の中央部を失い、
また台座の下框の側面の一部もいたんでいる。本来全身に鍍金があった
ものであろうが、火中した際失われたものか、現在は殆ど残らず、地肌
の色をみせている。たいへん重量のある像で、頭部から台座まで共吹に
造られ、台座の内部は空洞であるが、下から見ると、わずかに腰裳の上
の辺まで空洞であとはムクのようなものである。小像ながら量感にとんだ像
で、童顔に近い面相と動きのある体軀の造りも調和がとれ、極端に大き
い両足も本像に見事な安定感を与えている。長い曲線をえがいた眉、二
重瞼の眼、鼻筋の通った鼻、アクセントの強い唇や小さな顎の表現も、
きわめて巧みで、珠つなぎの文様でふちどられた衣文の彫出も技術の優
秀さを示している。

背面や台座もきわめて精巧である。宝髻の下の渦巻形の髪の毛の表現、
背中肉づけ、背面の腰裳にいたるまで省略することなく、造り出して

a 正面 b 左側面 c 右側面 d 背面

挿図7 a~f 半跏思惟像

福井 正林庵蔵

いる。台座の複弁式の蓮弁も力強い曲線を描き、下框の上面に波をあらわしているところなども余裕がみられ、正面観とともに本像の制作地が

e 斜右側面

恐らく、大和を中心とする地方の仏工の手になったものらしいことを伝えている。

この山千寺伝来の観音菩薩立像におとらぬ秀技を示した金銅仏は、福井県小浜市の正林庵の半跏思惟像（図版8）である。附近の人に如意輪観音として信仰されているこの半跏思惟像を伝える正林庵もまた日本海にのぞむ景勝の地に建っている。

f 底部

この半跏思惟像（挿図7）は、総高三三厘の像で、宝髪をたばねて髻とし、三面宝冠を頂き、左足を垂下し右足を左膝にのせ、左手をその上におき、右手にて頬杖をついた通有の半跏思惟像の姿をとる。三面宝冠の左右より長く飾紐をつけ、両耳の後方より出た髪の毛が両肩に垂れ、胸には瓔珞をつける。全体に鍍金は剝落し、黒色をていしている。三面宝冠や胸飾り、腕釧などは表面をみがき、金粉の如きものがおかれているが、これは後世の仕事である。

この像も、頭部より台座まで蠟型による一鑄の像で、内部をみると、空洞は頸の下まで及び台座の背後の部分と本体の胸の辺に一边が一厘ほどの方形の型持があり、膝裏の部分には、褐色の中型土が残っている。また台座の下框には、もと光背が差込まれていたと推定される穴が一つ残っている。

本像の鑿のきいた宝冠の造りや、童顔の名残りとどめつつやや成熟した面相、たつぷりと肉付のよい体軀や多少類型化した腰裳の衣文等、手なれた技法がうかがわれ、制作年代は天智五年（六六六）と推定され

a 右側面

b 背面
長野 長福寺蔵

挿図8 a~c 菩薩立像

c 上半身左側面

る大阪・野中寺の弥勒半跏像よりもやや下った頃の作らしいことを考えさせる。また、本像の精巧な技術や洗練された様式からしても、また小浜の地が当時の文化の中心地であった大和や山背と交通が多かったところから考えても、本像はこの地での制作ではなく、いつの時代かに、彼の地より移安されたものではないかと推定される。

中部地方には、もう一体、白鳳様を伝える銅造菩薩像がある。それは長野県小県郡東塩田村下之郷にある長福寺の像である（図版九、挿図8）。この銅像は本来長福寺に伝わったものではなく、もと小布施町の吉沢家にあったものといわれ、それを故大塚稔氏が求めて長福寺に寄進した像である。^{註10}

本像は頭に髻を結び、三面宝冠を頂き、両耳の後方から両肩にながく垂髪をたれ、胸には瓔珞をつけ、腰裳をまとう細身の像で、左手はまげて第一指と第三指を結び、右手は垂下して水瓶をとる姿に造り出されている。像高は三四・一糎である。この像も少くとも一度以上火中しているため破損箇所も多い。まず左手の肘より先を失い、右手の持物も水瓶の頭の部分以外は後補、天衣の右脇垂下部、裳、裾の後方の一部と台座の蓮肉上面以外はいずれも欠失していたのを近年乾漆で修理し、補足したものである。光背もその際新造された。

この菩薩立像も、蠟型による鑄造で、頭部から蓮肉までを一鑄としたものであるが、先の丸山茂氏他四氏共有の銅造観音像に比べると、技法はたいへん違う。丸山氏蔵の観音像が、鑿を盛んに使って瓔珞の文様や宝冠の文様を刻出しているのに対し、本像では鑄っぱなしのところが多

い。三面宝冠の両耳上の花文様にしても、胸飾りの花文様にしても花卉を刻み出さず丸文そのままにしている。プロポーシヨンも丸山氏蔵の観音像が頭部が大きく短躯なのに対して、本像は頭部小さく細身ですらりとしている。面相の表現にも、細技をつかわず、鑄っぱなしの感が強い。これらの違いは、両像の制作年代の違いというよりは、制作地及び工人の違いではないかと考えられ、丸山氏蔵の観音像が中央作なのに対し、本像は、あるいは地方での制作なのではないかということを考えさせる。

四

中部地方には、制作年代が八・九世紀頃と推定される銅像もいくつかある。その一つは現在その地を離れ、東京の長野高一氏の所蔵となっている銅造如来立像（挿図9）である。この像は、越中国氷見郡仏生寺村の洞窟に安置してあったと伝えられ、昭和二十三年四月に細見亮氏の名で重要美術品に指定されている。

この如来立像は、肉髻高く、丸顔で、頭部に比し体躯は短く、その体に厚手の衣を通肩にまとい、右腕は屈臂して前方につき出している。右手の第四指・五指の先が欠失しているためよく分らないが、第四・第五指をまげ他の三指をのばした印相のようである。左手は垂下して同様、第四・第五指をまげ、他の三指をのばす。善光寺式如来像に近い印相である。明かに如来相をしているが、尊名は不明である。

長年、洞窟内に安置されていたためか、全身蒼古としたあおさびにおわれ、鍍金は残っていない。頭部から台座まで、蠟型鑄物により共吹

らと肉づきのよい面相等は、新薬師寺の香薬師像に似ているが、それが地方化したような造りである。背面の衣文を線彫であらわしているところなども、地方化の一つのあらわれであろう。恐らく、本像は七世紀末か八世紀頃にこの地方で制作された銅像ではないだろうか。

この氷見仏生寺村に伝わった如来立像よりもややおくれた頃の像と考

a	正面	とした像で、台座の内部は空洞であるが、体軀は足までムクの像である。像高は二一・四糎、台座を含む総高は二五・六糎である。頭上には螺髪をつけていた形跡はない。衣は体に密着し、衣を通して体軀や脚の線が透いてみえるように造られているところや、ふっくらと肉づきのよい面相等は、新薬師寺の香薬師像に似ているが、それが地方化したような造りである。背面の衣文を線彫であらわしているところなども、地方化の一つのあらわれであろう。恐らく、本像は七世紀末か八世紀頃にこの地方で制作された銅像ではないだろうか。
b	斜側面	東京 長野高一氏蔵
c	左側面	如来立像
d	背面	挿図9

えられるのは、岐阜・横蔵寺の薬師如来立像である。この像については、すでに「美術研究」二六〇号^{註11}においてふれているので重複をさけ、ここでは簡単に述べることにしたい。

横蔵寺の薬師如来像は、螺髪を刻線であらわし、身には通肩に衣をまとい広く胸をひらいている。左手は肘でまげて薬壺をとり、右手は垂下して衣の一部をにぎりしめた姿の像である。像高は三七糎。この像もかるく火中しており、鍍金は殆ど失われ、全身黒色をていしている。本像の裳の部分には、「遂授澄貞元廿一四月」とあり、最澄が渡唐していた時にその師道邃がかれに授けたものという。しかし、この刻銘は、恐らく後世の追刻と考えられる。また、本像は中国仏ではなく、日本での制作と推定される。その洗練された技法や様式からその制作年代は八世紀頃、しかも中央で造顕され、いつの時代かに横蔵寺に移安されたものではないかと考えられる。

金沢市の伏見寺に伝わる金銅阿弥陀如来坐像（挿図10）は、二一・四糎の小像ではあるが、平安時代初期の作風をもつまれな銅像として貴重である。両手をまげ、胸前で説法印を結んだ阿弥陀如来像で、この印相は広隆寺講堂の阿弥陀如来像と共通し、また左の袖口の衣文等は、大阪・獅子窟寺の薬師如来像に類似している。蠟型による一鑄の像で、底からみると膝前の辺に湯口と考えられるあとをのこし、胎内の中心部には鑄造後に鉄心を抜いたと思われる穴が残っている。

この像は体軀に比べ頭部が大きく、小像ながら気宇広大な感じを与える。面相や衣文の表現も優秀で、前記した広隆寺講堂の阿弥陀如来像や

a 正面

b 左側面

c 背面

a ~ d 阿弥陀如来坐像

石川 伏見寺蔵

d 底部

獅子窟寺の薬師如来像と近い要素をもっていることは、本像が九世紀の制作であることを伝えると同時に、中央作らしいことを物語っている。

最後に新潟県下にある二軀の像について触れておきたい。その一つは、新潟県五泉市大字川瀬にある願成寺の観音菩薩立像（挿図11）である。こ

の古様な形式をもつ銅造観音立像が、いつ頃からこの寺に伝わったものかは不明であるが、その姿は宝髻を高く結びあげ、三面宝冠を頂き、胸

に瓔珞をつけ腰裳をまとい、左手を垂下して、持物をもっていたような手つきをしている。右手は肘をまげて掌を正面にむけ、第二指から四指までを曲げている。やや腰をひねって蓮華座に立つ姿である。頭部から体軀蓮華座まで一鑄の像であるが、この像も火中しており、表面は灰色の肌をしている。胎内は空洞であるが、肉はかなり厚い。像高は二五・三糎、総高は三〇・五糎である。本像は、昭和三十五年三月に新潟県の文化財に指定されているが、本像の制作年代等については、なお研究の余地のある銅像と考えられ、ここでは紹介するにとどめておきたい。

また、新潟県直江津市の国分寺にも、一軀銅造の菩薩の小像がある。これは第二次大戦後、佐渡に疎開していた人が帰途国分寺に収めたものという。この像も火中しており、表面はやけ肌になっている。三面宝冠を頂き、左手で天衣をとる姿で、蓮肉まで一鑄の像、像高は一六糎、蓮肉を加えた総高が一九・五糎の像である。上記したように本像は、その伝来からしても中部地方とは関係の薄いものであるが、その作風からみて八世紀頃に制作された地方作の銅像と考えられる。

挿図11 観音菩薩立像
新潟 願成寺蔵

五

以上中部地方に散在する古代の銅仏像について縷述したが、個々の遺品の記述を多少詳細に書いたために論旨が不明確になったきらいがあるので、ここに私の考えるところを要約して結びとしたい。中部地方の古代銅像は、その分布の仕方の一つの特徴がある。すなわち、古代銅像は太平洋側の諸県にはわずかに二点遺っているにすぎない。愛知・正眼寺の誕生仏と岐阜・横蔵寺の薬師如来立像がそれで、これらはその作風・技法からみて、畿内において制作され、いつの時代かに現在の寺に移安された像と考えられる。中部地方の古代銅像が多く分布しているのは、日本海側の福井・石川・富山・新潟及び長野の諸県である。古代金銅像が日本海側の諸県ことに海岸に面した諸寺に多く伝わっているのは、決して偶然ではあるまい。六・七世紀において、これらの地方に、朝鮮からの使者等が多く漂着している事実は、潮流等の関係からで、このことは、古い時代には大陸からの渡来民が、この地に漂流し、土着したのも多かったろうことを想像させる。ただ長野県は、日本海を遠くはなれているにも拘らず古代銅像が多数伝わっている。これもまた朝鮮との関係が考えられる。朝鮮仏の直模の観がある菩薩半跏像を伝える観松院は、北安曇郡にあるが、この地は、玄海灘に本拠地をもつ安曇族海人によつて開かれたために、この名があるといわれ、古くから渡来系氏族が住みついてきたところである。また信州には特殊な形式の古墳が多数分布している。古墳の天井を左右両壁から石を斜めに立て頂上部で、合掌形にした形式や積石式の古墳などがそれである。この古墳も朝鮮に多く

の例がみられ、この地方に土着した百済ないし高句麗からの渡来人の墳墓と推定されている。七世紀中葉頃に創建された長野・善光寺の本尊も、百済からの渡来仏と伝えられ、この寺が一名百済寺と呼ばれたことも、この地方と朝鮮との深い関係を物語っている。

これら中部地方の古代銅像をその技法や様式から分類すると、次のようなことが考えられる。すなわち、新潟・関山神社の菩薩立像のように朝鮮から渡来したものではないかと考えられる像、長野・観松院の菩薩半跏像や石川・薬師寺の伝薬師三尊像のように、朝鮮から渡来してそれほど年代をへていない大陸系工人により制作されたのではないかと推定される像、長野・丸山茂氏他四氏共有の観音菩薩立像や、福井・正林庵の菩薩半跏思惟像、新潟・医王寺の伝薬師如来像、石川・伏見寺の阿弥陀如来像のように、中央で制作され、それがいつの時代かにこの地に移安されたものではないかと思われる像、さらに、長野・長福寺の菩薩像や富山仏生寺村の洞窟に伝わった如来立像のように、恐らくこの地方で造顕されたものと考えられる遺像等に分けることができる。この地方で銅像が制作されても決して不思議ではないことは、当時の文化の中心からより遠くはなれた関東地方においても、七世紀末頃には、千葉・竜角寺の薬師如来像や、東京・深大寺の釈迦如来像等が造られている事実からも推定できよう。

中部地方に残る七・八・九世紀の銅像はいずれも三十糎内外の小像ではあるが、以上のような美術史的、歴史的意義をもつものではないかと私は考えている。

註一 吉田東伍氏「大日本地名辞書」第三卷 大正十二年二月 富山房刊

註二 斎藤忠氏「屋根型天井を有する石室墳に就いて」『考古学雑誌』三四ノ三 昭和十九年三月

註三 大塚初重・小林三郎・下平秀夫氏「信濃長原古墳群——積石塚の調査」昭和四十三年十月 長野県考古学会刊

註四 大塚初重氏「長野県大室古墳群」『考古学集刊』四ノ二 昭和四十四年四月

註五 大場磐雄氏は「長野県筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査」(『信濃』第一六卷四・六号 昭和三十九年)において次のように述べている。「この地は日本後紀桓武天皇延暦十六年の条に、高句麗からの帰化人に賜姓された安坂氏の居住地とせられており、更に彼等は推古・舒明兩朝の頃に渡来帰化した人々であると記載されているから、その人々の居住地において、高句麗特有の積石塚が行われたとするならば、文献と考古学資料とが吻合して、頗る明快に解決されたといつて差支あるまい。しかしこの問題については更に信濃国全体、否日本の全体に亘つて積石塚の性格を再検討する必要がある。ある学者は積石塚と帰化人(高句麗人)との関連に疑問をもっており、積石塚の発生を別な方面から説こうとしている。その一つの反証として、高句麗人が積石塚を盛んに営造したのは通溝居住時代で、後の平壤に移った頃は衰微し土塚盛行期に入っており、信濃国の積石塚の築造が、古墳時代の後期が主で、平壤時代に入ってからであるから、そこに齟齬があるとするのである。自分もその点について一応の疑問をもっていた。然るに前記の須坂市鎧塚や今回の將軍塚が、発掘調査の結果、共に五世紀にまで遡るべることが判明して、彼の通溝古居時代と年代的に一致を示して来たことは、この反証に対する反証ともなるであろう。」と述べ次のように結んでいる。すなわち「信濃国安坂村における限りは、前に考察した通り、高句麗人の移住と堅く結びついていると信ずる。今回の調査でその子孫は二世紀余りも因習を守つて積石塚を営造して来た。その最初の主が永い眠りにつき、いつまでも子孫によつて仰ぎいつかれた奥津城こそ東山の山頂近くの將軍塚に他ならないのであると」

註六 米山一政氏「善光寺瓦と善光寺の草創」一志茂樹先生還暦記念会編「地方研究論叢」所収 昭和二十九年十一月刊 及び同「善光寺古縁起について」『信濃』九ノ六 昭和三十三年六月及び浅川欽一氏「長野県の文化財」『郷土の文化財六』所収

昭和四十一年一月刊

註七 拙稿「二つの古代銅像」史迹と美術三五九号 昭和四十年十一月及び「夢殿観音と百済観音」昭和四十八年十月 岩波書店刊

註八 佐々木隆美氏「東海の仏像」北部編 昭和三十三年 名古屋鉄道株式会社刊

註九 小林剛氏「御物金銅仏像」(昭和二十二年十二月国立博物館刊)に第一号像として記述されている如來像

註一〇 倉田文作氏「長野県文化財図録」美術工芸篇 昭和三十年二月 長野県教育委員刊

註一一 拙稿「平安初期における延暦寺の仏像」『美術研究』二六〇号 昭和四十四年九月

註一二 聖德太子伝私記には、聖德太子の建立した四十六箇院の中に阿弥陀院をあげ「信濃国後名善光寺本名百済寺」とある。

美術研究所報

昭和46年7月〜昭和47年12月 交換及受贈圖書雑誌 その五

帝塚山大学紀要 4〜8 東京国立博物館年報 46年版

帝塚山短大紀要 9 陶説 220〜237

鉄斎研究 5〜9 東洋文化 52

東方学 42〜44 東洋文化研究所紀要 56〜58

東方学報(京都) 43 東洋文庫書報 2, 3

東北大学日本文化研究所研究報告(7・8) 別巻(8・9) 東洋学報 53—(3・4)〜54—3

刀剣美術 174〜191 東洋学術研究 10—2〜11—3

東京大学新聞研究所紀要 20 東洋史研究 13—1, 2

東京大学史料編纂所報 5, 6 津田塾大学紀要 4

東京学芸大学研究報告 第3部門—23, 24 浮世絵芸術 30〜34

東京芸術大学美術学部紀要 7, 8 早稲田大学図書館紀要 12, 13

中部地方の古代銅像

東京家政大学研究紀要 12

東京経済大学人文自然科学論集 27〜30

東京国立博物館紀要 7 大和文華 54〜56

A. Le Bonheur : La Sculpture Indonésienne au Musée Guimet Musée Guimet

A. -M. Loth : La Vie Publique et Privée dans l'Inde Ancienne 9

P. Stern : Colonnes Indiennes d'Ajanta et d'Ellora

The Freer Indian Sculpture

K. K. Varma : The Indian Technique of Clay Modelling

A. -R. Peltier : Le Syvasvat

W. Rahula : Le Compendium de la Super Doctrine d'Asanga

C. Tsu-Lung : Eloges de Personages Eminents de Touen-Houang

A. Bareaux : Recherches sur la Biographie du Buddha 2

A. Lévy : Etude Sur le Conte et le Roman Chinois

R. Billard : L'astonomie Indienne

J. Boulbet : Dialogue Lyrique des Cau Maai

N. -T. -Huan : Thu'o'ng Kinh Ly'-Su'

C. S. Fowler : Anthropology of the Numa

D. D. Fowler

Kokusai Bunka Shinkokai Bibliography of Standard Reference Books for Japanese Studies

Buddhistische Plastik aus Japan und China (Bestandskatalog)

B. A. Литвинский Алкина-Телга Т. И. Зейманц

Arts Conference 70 : Policy into Action

Colin McCahon

Milan Mrkusich

山梨大学教育学部歴史学論集 15

Freer Gallery of Art

K. M. Varma Ecole Française d'Extrême-Orient

Smithsonian Institution

Kokusai Bunka Shinkokai

Museum für Ostasiatische Kunst der Stadt Köln

ユネスコ東アジア文化センター

Queen Elizabeth II Art Council of Newzealand